

研究課題	ケイトウの夏秋期安定出荷に向けた品種特性調査
背景・ねらい	従来、ケイトウは盆・秋彼岸に大きな需要がある重要な花き品目であったが、近年では久留米系統以外の利用が増加しており、周年で使われる花材となっている。本試験では、盆・秋彼岸出しを含めた連続出荷の可能性について検討する。
担当者	山口 次郎, 渡邊 智之, 船木 武人, 渡邊 一彦, 今井 万葉
研究期間	2019～(1年目)

1 目的

盆・秋彼岸を含めた夏秋期の安定出荷および品質向上を図るため、各時期における品種特性を調べることを目的とする。

2 方法

(1) 供試品種 (10 品種)

デリーシリーズ：パープル，パール，レインボー<ミヨシ>

アクトシリーズ：グリーン，オレンジ，イエロー，ベルベット，ローズ<ムラカミシード>

久留米系統：フィジーラブ，オレンジクイーン<ミヨシ>

(2) 試験区の構成・規模

4区2反復 1区10品種各56本

(3) 耕種概要

ア 試験圃場：パイプハウス (砂土)

イ 播種・定植：播種 (4月2日, 5月8日, 6月3日, 7月2日)

定植 (4月23日, 5月28日, 6月25日, 7月18日)

ウ 栽植様式：畝幅 80 cm, 条間 11 cm, 株間 10cm, 8条植え (9条中央部灌水チューブ)

エ 施肥：基肥なし，追肥 適宜状況をみて液肥 (N-P₂O₅-K₂O =8-6-5) で施用

(4) 調査項目

採花日，採花本数，切花長，花径，茎径，節数，重量

3 結果の概要

(1) デリーシリーズは、4月播種区と7月播種区で到花日数が50日と、最も大きな差がみられた。(図1)。切花長は5、6月播種区で伸びる傾向にあり、重量には大きな個体間差がみられた。花径は全播種区で9cm台であった。

(2) アクトシリーズは、6月播種区まで到花日数は約90日で、7月は約80日と10日短くなる傾向がみられた。切花長は右肩上がりに伸びる傾向にあり、重量はデリーと同様に5、6月播種区で大きな個体間差を示した。花径は10～11cm台であった。

(3) 久留米系は、いずれも到花日数が緩やかに短くなる傾向にあった。切花長は品種間差が顕著であり、フィジーラブが5月以降ほぼ横ばいであったのに対して、オレンジクイーンは6月がピークとなった。花径は播種区で差がみられ、4月は5～6cm台と他の月に比べ小ぶりであった。

(4) デリー、アクトともに6、7月播種区で奇形花が多くなり、デリーパール、アクトグリーンを除く全品種で顕著な発生がみられた(図2)。一方で、久留米系では奇形の発生がみられなかった。

4 まとめ

到花日数は、供試したシリーズ全てが7月に最短となる傾向を示し、特にデリーシリーズは播種区間で最大約50日の開きがみられた。アクトおよび久留米系はデリーシリーズに比べて日数の開きが少なかった。

切花長は、全体的に右肩上がりの傾向が見られたが、7月播種区で短くなる品種もみられた。

花径は、産地においてトサカ系品種の秀品規格を10～13cmとしているが、本試験では9～11cmと規格に達しておらず、施肥等を含めた耕種の検討が必要である。

生育は全体的に良好であったが、品種によっては播種時期の遅い6、7月に奇形花の発生が確認されており、奇形の程度によっては規格外となるものもあるため、実質的な採花率は表1に示した値よりも低くなると考えられる。なお、奇形発生の原因については判然としていない。

4月・5月播種区については、電照等による2番花採花の可能性が考えられるため、次年度以降検討したい。

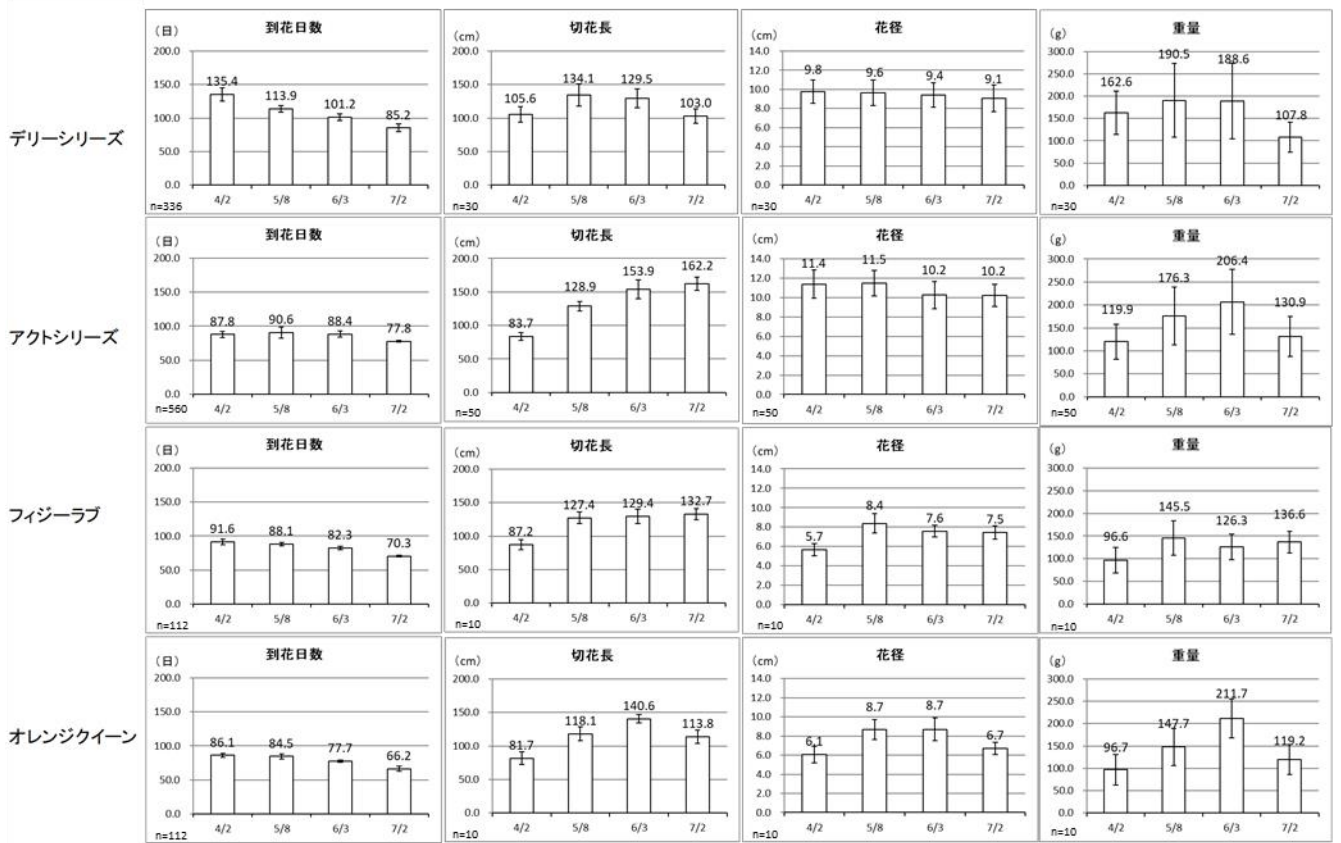


図1 到花日数および各形質（エラーバーは標準偏差）

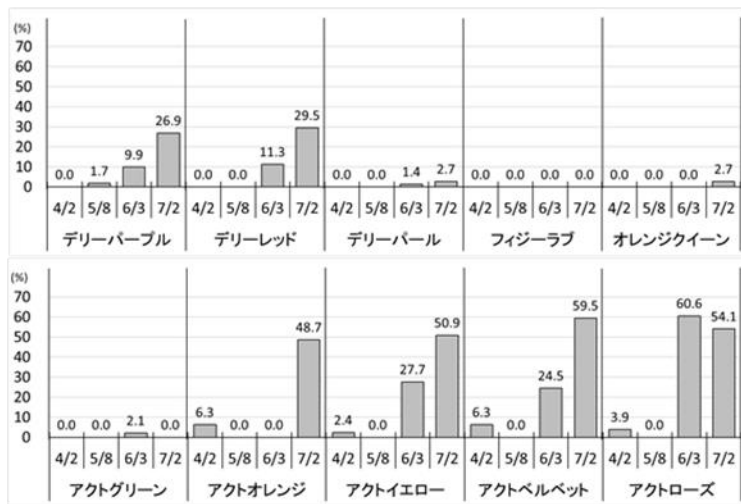


図2 奇形花発生率および奇形花の写真

（左：正常花 右：奇形花 6月播種区アクトローズ）

表1 平均採花日と採花率

品種名	播種日	平均採花日 (月/日)	採花率 (%)
デリーシリーズ	4月2日	8/15	97.9%
	5月8日	8/29	96.4%
	6月3日	9/12	93.8%
	7月2日	9/25	96.4%
アクトシリーズ	4月2日	6/28	99.5%
	5月8日	8/6	98.4%
	6月3日	8/30	99.0%
	7月2日	9/17	99.8%

品種名	播種日	平均採花日 (月/日)	採花率 (%)
フィジーラブ	4月2日	7/2	97.7%
	5月8日	8/4	100.0%
	6月3日	8/24	96.9%
	7月2日	9/10	100.0%
オレンジクイーン	4月2日	6/27	100.0%
	5月8日	7/31	98.4%
	6月3日	8/19	81.9%
	7月2日	9/6	100.0%